



# 日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



## キルギス料理講習会

安部 花子

5月12日、田町リーブラでのキルギス料理教室に参加しました安部と申します。今回はキルギス大使館の大使夫人ジャミーリヤさんが企画してくださいました。キルギス料理教室への参加は2022年5月開催以来で、およそ2年ぶりの参加となりました。

今回の献立は、肉入りマンティ、揚げパン、ピーツとザワークラウトのサラダの三品。待ちわびていたキルギス

料理の代表選手、マンティ！ロシアではペリメニ、日本では餃子、グルジアではヒンカリなどと、世界中に類似するご当地料理が存在するみんなの大好きメニューです。

キルギスの国旗は40本の光条を放つ太陽がモチーフとして描かれており、その数が表すとおり40もの部族を擁する他民族国家で、90%がイスラム教徒なのだそうです。そのため日本の餃子では豚ひき肉を種にする場合が多いですが、今回のマンティの中身は牛肉、しかもひき肉ではなく塊肉を細かく切ったものを種にするとのことで、なんだかとてもリッチな気分！そしてベジタリアンの参加者のために、肉なしの野菜入りマンティも同時に料理。多様性や個人の嗜好に配慮したバリエーションに、日本にはない他民族国家の風を感じます。

民族衣装の美しいレースを紡ぐような手つきで、マンティの皮の中へ種をきれいに閉じ込めていく先生。どう頑張っても均一な折り目で閉じ合わせることができずに苦戦する私た



ち…。しかし、先生がおしゃれな見た目でも簡単に閉じるやり方を教えて下さり一安心。揚げパンとサラダも無事完成し、いざ実食タイム！

肉入りマンティはとにかく濃厚な肉の味がガツン！ときます。餃子であれば一つの種に肉とニラが入っており多様な味わいがありますが、今回の肉入りマンティはまじりっけなしの肉100%。玉ねぎとニンニクの香味が肉の味を倍増させます。肉に飽きたら

野菜、野菜に飽きたら肉、と2種類のマンティを行き来するのはなんと幸せなことか。ロシア料理であればマヨネーズやスメタナ（サワークリーム）を塗って食べる場合が多いですが、今回は赤トウガラシとニンニクを植物油で炒めた先生特製の薬味をつけていただきました。大量につると激辛ですが、少量をつけると味がまた新鮮に感じられ、非常に病みつきになります。この植物油は調理工程の途中で使用した、ニンニクの風味が移った美味しい油の残りを再利用しています。食材を余すところなく使用する姿勢は、ロシア料理とも通ずるところがあります。この薬味は日本人参加者の中でも評価が真っ二つに割れました。辛すぎて食べられない！という人もいれば、余った分を全部持って帰ろうとするほど虜になってしまった人もいて、他の人の反応を見られるのも料理教室の醍醐味だなあと、非常に興味深かったです。

ピーツとザワークラウトのサラダも、口の中が油っぽくなった時にさっぱりとリセットさせることができ、とても良い箸休めでした。外はサクサク、中はモチモチの揚げたてパンは、マンティのお供にはもちろん、練乳をつけてデザートにも早変わり。金曜日の夜、家で映画でも見ていようものなら40個は平らげそうな病みつきスイーツでした。

最後にみんなで洗い物をし、施設の調理器具を片づけたあと、部屋の隅っこに大きな調理器具の山がありました。使い慣れた道具で美味しい料理を食べさせようと、先生が私たちのためにわざわざ持ってきてくださったものです。そのおもてなしの気持ちが、なにより嬉しいごちそうでした。本当にありがとうございました。

### お知らせ

#### ●イワン・クペラ祭り

日時: 2024年7月13日 (土) 10:30~15:00

集合: 10:00 開始: 10:30

場所: みなとヶ丘ふ頭公園

会費: 一般2500円、会員2000円、外国人1000円

#### ●ロシア語合宿

日時: 2024年8月10日 (土) ~11日 (日)

場所: 伊豆畑毛温泉・富士見荘

参加費: 24,000円 (税込) 講師料、宿泊代、2食付き

講師: ボロビエフ先生 (初級)、スニコ先生 (中級)

申込締切: 7月26日、お支払いは7月31日までに

#### ●ロシア語教室生徒募集中!

初級、中級、上級クラス、プライベートクラスを経験豊富なロシア人教師が担当いたします。オンラインレッスンもあり見学もできますので、どうぞ事務局までご連絡ください。

\*お問い合わせは事務局までお願いします。

Fax: 03-5563-0752 E-Mail: [nichiro@nichiro.org](mailto:nichiro@nichiro.org)

### お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。なお、寄付とわかるようにお名前の前に番号「01」と入れてください。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: [nichiro@nichiro.org](mailto:nichiro@nichiro.org)



## 日本の家庭料理講習会(3)

長島 さくら

5月25日(土)の日本の家庭料理講習会には、在日ロシア大使館より16名と日本人6名が参加しました。講師は小野田正子先生、献立は大豆ご飯、仙台麩卵とじ、タコの酢の物でした。先生は毎回多様な食材を使いつつごく一般的な家庭料理を紹介して下さるので、ロシア人の方々にとっても日本人にとっても、日本の料理や食材を深く学べる貴重な機会になっていると感じます。

まず大豆ご飯を作るため、研いだ米にひじき、大豆の水煮、調味料を加え炊飯器で炊きました。ロシア人の皆さんが「私たちは水煮の豆をサラダによく使います」と話してくれました。ロシアのサラダには主にいんげん豆やレンズ豆、えんどう豆、ひよこ豆を使うそうです。たしかに豆がよく入っていた記憶があります。ロシア留学時に食べていた、赤いんげん豆、ソーセージ、コーンなどをマヨネーズであえたサラダを思い出し懐かしくなりました。私は2018年から1年半、ロシア リャザン州のリャザン国立大学に留学しました。大学の売店には5~6種類のサラダが小さい容器で売っており、サラダとパン(特にソーセージパンやピザパンが人気でした)を買って授業の合間に食べるのが現地の学生の間で定番でした。私も真似して、先ほどのいんげん豆のサラダを食べながら宿題を必死にやっていました。売店では友達や先生に会うことも多く、そこで一緒に勉強したり、他愛もない話をしたことも良い思い出です。

過去の講習会で、ロシア人の皆さんが卵料理の調理を熱心にやる姿が印象的でしたが、今回の仙台麩卵とじでも、溶き卵を回し入れる作業を真剣にやっていました。毎回そうした姿を見ると、日本料理は卵の調理方法が豊富で面白いことに



気付かされます。卵焼き、錦糸卵、卵とじ、オムライス、かき卵汁、茶碗蒸しなど、卵という食材を様々な姿かたちに変化させて活かす点は、日本料理の魅力の一つなのかも、と思いました。

調理中、ロシア人の方は菜箸にも興味を持っていて「本当に便利!」と話していました。たしかに料理を選ばず使えてコンパクトな菜箸は私たちにとっては必需品ですが、言われなければその優秀さには気付かなかった気がします。私も先日、ロシア料理講習会でオリヴィエ(Салат Оливье)を作った際、ロシアの方が持参したОвощерезкаと呼ばれる調理道具(野菜などをさいの目にカットできる道具)を使いました。日本にも似たものはありますが、ロシアではわりとポピュラーなものだそうです。実は記念に道具を頂いたので、自宅でも特に茹で卵を切りたい時などに重宝しています。レシピ上では分からない、お互いの国の身近な調理道具について知ることも、一緒に料理をすることで出来ることだと感じました。

お麩や酢の物は初めての方も多くいましたが「美味しい」と言って完食していました。食後の玄米茶と黒糖飴も気に入った方が多くいたようです。料理講習会に参加すると、ロシアでの過去の体験がリンクしたり、日本の身近な文化を改めて考えたり、自分の知識がブラッシュアップされます。小野田先生、企画して下さいました。参加者の皆様、本当にありがとうございました。



## 山梨日帰りバス旅行

前田 玲子

6月12日(水)、ロシア大使館の方々39人と日口交流協会会員3名の山梨日帰り旅行に参加させていただきました。朝8時、大使館前をバスで出発。この日は日本中どこも熱かったようです。盆地である山梨はことさら暑いというガイドさんの説明を聞きながら、冷房の効いたバスで中央高速をスイスイと渡辺農園に到着。農園では赤いかわいいサクランボを30分間採り放題、食べ放題で楽しいおいしい時間を過ごし、次の目的地、恵林寺へと向かいました。



以前、訪れたことのある寺でしたが、武田信玄の菩提寺ということぐらいしか覚えておらず、これほど奥深い荘厳な寺とは記憶していませんでした。枯山水式の庭園や無窓国師の築堤庭園など見どころが多く、大使館の方々もとても気に入られて興味深く見学されていました。私が強く印象に残っているのは、本堂の中で突如現れた漆黒の闇の回廊でした。あとで教えていただいたのですが、善行寺の戒壇巡りと同じで「闇の中を通り抜ければ穢れが拭われて生まれ変わる」というところだそうです。突然、真っ暗闇の中に入ったときは、子どもの頃、遊園地のお化け屋敷に入

り込んだときの恐怖心がよみがえり、とても怖かったです。でも、ロシアの方々は通り抜けて若返ったようだ、と言って笑っていたこともなく通過されたようでした。本堂はどこも小声で社員も禁止でしたが、皆まじめに守って静かに見学されていました。

昼食は恵林寺の向かい側のレストランで、ホウトウとおこわなど。とてもおいしかったです。ほうとうは量が多かったので少し残されていた方もいました。レストラン前の黄金の武田信玄像の前で記念写真を撮りました。

食後はフルーツ公園へ。園内はスモモやブドウなどが実る果樹園があり、また高低差のある園内の色々な場所からは富士山と甲府盆地を一望でき、素晴らしい景色を見ながら開放感を感じることができました。

最後は勝沼独特のマルスワイナリーに寄り、各種のワインを試飲背ていただきました。皆さん両手にたくさんのお土産を買われて帰路につきました。帰りもあまり渋滞にあわず、明るいうちに無事、大使館前で解散となりました。大使館の方々、次の企画を楽しみにしています、と口々に言っておられました。



## きもの体験 (2)

千葉 麻里

4月には通商代表部で行われた毎年恒例のきもの体験が、5月15日

(水) 12時から大使館の小ホールで実施された。大使館では昨年は4回ものリクエストがあった。しかし、一年間文化交流の窓口を積極的にしてくれたタチヤーナさんが急遽帰国することとなり、この日が最後になると伺った。別れを惜しみながらの半日となった。

6月からは任期を終えて帰国される方が出てくる。日本語を熱心に続けておられた方も、料理講習会等に積極的に参加されていた方も帰られると聞いて寂しい時期である。この日は最後の記念にと家族で写真を撮って行かれる方も…

着付けはいつものメンバーのうちの2名、辻田先生、森先生と私の生徒が助手として入り、4名で担当した。着付ける方々はいつもよりかなり少なくて女性9名、男性8名、女兒3人、男児4人の計24名。タチヤーナさんの作成してくれた時間割に合わせて振袖と男性の揃いは4セットずつ、子どもた



ちの着物は身長に合わせて男女2セットずつ用意した。

人数が少なかったので、今回は時間にも余裕があり3時頃には終わった。家族写真も昨年よりはゆっくり時間をかけてもらえたのではないかと思う。日本滞在のいい記念となり喜んで頂けたことが、私たちにとっては一番うれしいことだ。

タチヤーナさんは本当に細かい気配りをされて、計画する側にも参加者の方々にも様々な配慮してこられた。連絡も密で、いつでも回答が早くしっかりと人数を集めてすべて把握していた。

文化、芸術、スポーツの世界は政治などを超え、それに決して左右されてはならないと思っている。しかし、これだけ協会が色々な交流を地道に続けてこられたのも、タチヤーナさんのような方の協力があってからののだ。タチヤーナさんから引き継いだウラジーミルさんも、日本語教室を支えてくれている奥様のアンナさんも、生け花や友禅教室のナターリヤさん、ユーリヤさんも交流協会にとってなくてはならない人たちである。日頃の感謝をささげたいと思う。(副会長)

## 明治初年の日本通アレクサンドル・マレンダ

倉田 有佳

アレクサンドル・マレンダ (Маленда) が、フォードル・カルリオーニン、アレクサンドル・ユガノフと共に函館のロシア領事館に派遣されて来たのは1858年10月頃のことだった。三人は日本語の通訳官を囑望され、海軍から派遣された「見習い水兵」で、日本語は、首都サンクトペテルブルクでゴシケーヴィチ (1814-75) から手ほどきを受けていた。

来函時は、まだ10代前半の少年だったと思われるが、早々に通訳の現場に立たされた。マレンダとユガノフは、日本人にロシア語を教授するニコライ (1861年に在函館ロシア領事館付属聖堂司祭として来函) の補助も務めた。

最後まで函館に留まったのがマレンダで、地元住民との係争、さらには樺太の境界談判の通訳も務めた。1872年、首都東京に新設されたロシア公使館の通訳に任ぜられ、函館を去った。

マレンダと言えば、日本人女性との間にもうけた娘 (エカテリーナ) を認知せず、パーヴェル中井 (中井木菟麻呂 (つぐまる)) が養女とし、「中井春子」を名乗ったこと (中村健之介・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』)、マレンダの死を知ったニコライが、「宣教団にとって有害な人物だった」、「マレンダよりも忌まわしい人間がいるだろうか」

(『宣教師ニコライの全日記9』274頁)、などと痛烈に非難したことが想起されよう。

出世欲が強く、身勝手な人間だったような印象を受ける



60466

3327

外交史料館

が、同時代の日本人からは、日本語が堪能で日本通の外国人と見なされていたようである。歌人としても知られる鈴木重嶺 (しげね) は、箱根芦之湯の松坂屋旅館で偶然マレンダの隣室となり、外国人とは思えぬほどの日本語力や和服を粋に着こなす様子を「旅寝のすさひ (承前)」(『詞林』(16)、鶯蛙吟社、1897年、12頁) に記している。

「東京地学協会」(1879年4月18日設立)の会員に名を連ね、離日後は通信会員となったマレンダだが、帰国から数カ月後の1885年7月20日、ペテルブルクで亡くなった。その死は日本でも報じられた(『大阪朝日新聞』1885年7月28日朝刊一面・『読売新聞』1886年1月4日一面)。うち『朝日』は、アーネスト・サトウとシーボルトの二氏と並ぶ「日本語の名人」で「非常の勉強家」で、「惜しむべき人を失へり」と哀悼の意を表し、『読売』は、勲五等に叙せられ双光旭日章を贈られた、とマレンダの功績を讃えた。

函館時代の下積みから公使館通訳にまで昇りつめ、芸者遊びもすれば、政財界の重鎮や文化人との交流もあったマレンダの多彩な知見が、その早い死によって帰国後のロシアで活かされなかったことが惜まれる。なお、ロシアにおける日本語教育・研究が活発化するのには、1890年代以降のことである。(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)

左：1878年9月19日付でマレンダが外務書記官に宛てた書簡 (「9. 明治十一年」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B18010412800、各国外交官及領事官其他「リスト」雑纂/在本邦之部 第一巻/各国公使館員及領事館員姓名調書 (6.1.8.7-1-2.001) (外務省外交史料館)

## 人間の境界

畔上 明

2023年ヴェネツィア映画祭審査員特別賞受賞作「人間の境界 (原題「緑の国境」)」は衝撃的です。ベラルーシとポーランドの間にまたがる森の中の国境を舞台としたドキュメンタリーさながらの迫力ある描写は、ポーランドの女性監督アグニエシカ・ホラントによる力作です。

1976年に20代の私が初めてソ連国境を列車で通過してポーランドへと向かったときは平和そのものでした。80%も戦禍で焼失し戦後30年以上を経たとはいえその傷跡がまだ完全に癒えたと思えぬ街なかでのショッピング、劇場、映画館、競技場で休日を謳歌する白ロシアの人たちとそぞろ歩きをしたミンスク、その中央駅から夜行列車に乗って西の隣国の首都ワルシャワへと目指す道中、同室のエスペランティストのフィンランド人夫妻とお喋りしていた真夜中に国境にたどり着いたときの税関検査、出入国検査は形式的で意外とあっけない印象でした。

それから半世紀近く経って、鉄道マニアの知人がベラルーシとポーランドとの国境の町ブレストを経由する列車の旅を経験、その様子を聞かせてもらいました。旧ソ連のレールが広軌(1,520mm)でありヨーロッパが標準軌(1,435mm)と軌間が異なるため、ブレストでは車体が持ち上げられ台車が交換される状態をつぶさに観察したとの鉄道オタクならではの話に、かつては一体どのようにしていたものか不思議な思いがしました。

2016年には旅行業に携わる面々によるベラルーシ視察の機会を得ました。ルカシェンコ政権下の難しい生活環境の中で、現地の



ガイドや旅行手配会社の人たちの観光客誘致に向けた熱意には心打たれ、リトアニア大公国時代の城の数々、シャガールの故郷ヴィーツェプスクなど幾つもの魅力を感じました。特に、ベラルーシとポーランドにまたがる世界自然遺産ペロヴェーシの森は500頭ものバイソンが棲息する自然保護地区としても知られていますが、中心部45%は立入禁止ながら観光ゾーンは車で回ることが出来ます。イノシシ、アカジカ、ヘラジカ、タヌキ、テン、オオカミ、クマ、ノロジカなども棲息、エゾ松、白樺、楓、シナノキ、樅、赤松、ヤチダモ、榎などの針葉混合の見事な樹林を見て回ることが出来ます。1万7千ヘクタールの原生林の樹齢はおおよそ400年、中でも高さ28.5m、直径2m、樹齢600年を超える樅を抱きかかえたときは、その生命力が伝わってくるかのようでした。

話を映画「人間の国境」に戻しますと、シリアやアフガニスタンなどから逃れてきた人々が航空機でミンスクまでやってきて、そこから事前連絡していた車でベラルーシの国境を抜け出るあたりから観ていてつらい場面が展開していきます。

ようやく国境のポーランドに入ることが出来たと喜び難民たちに、ポーランド側の国境警備隊が「ルカシェンコの銃弾が撃ち込まれた」とばかりに難民たちを力づくでベラルーシに押し戻すのです。そして、難民たちが両国の間を幾度も行ったり来たりするような悲劇が起こり、難民救済にあたらうとするボランティア団体の人たちとの絡みも描かれ複雑な国際情勢があぶり出されていくのでした。

## ニコラー・レーリヒとスモレンスク

浜野 道博

ニコライ・レーリヒ (1874-1947) の名と幅広い業績を知っている人は多い。しかし、彼が生き活躍した時代から100年ほど経った最近では、ごく控えめに「ロシアの画家」と呼ばれている。クインジーに師事し、ロシア美術アカデミー会員 (1909) として生涯に7000点を超える作品を残した画家として並々ならぬ才能の持ち主であることはたしかである。

私は2011年にニジニーノヴゴロドに赴任した時、地元の国立美術館でレーリヒの作品に遭遇し強い印象を受けた。実は1993年にハバロフスク美術館の一角で行われていた「レーリヒ展」の不思議なオーラに打たれて何枚かのレプリカを手に入れていたのであながち無縁でもなかった。最近では生誕150周年を記念する大規模な回顧展がモスクワ・トレチャコフ画廊 (別館) で開催され、画家、思想家、作家・脚本家、考古学者、探検家および社会活動家といくつもの顔をもつレーリヒが詳しく紹介された。

サンクトペテルブルクに生まれ、アメリカを経て、インドで没したレーリヒの足跡をたどることは他に譲り、ロシア古美術の発見と再評価に力を注ぎ、それらの保存に心を砕いたレーリヒに注目したい。

レーリヒは少年のころからロシアの歴史に関心をもち1892年18歳になるとロシア北西地域の考古学的調査にみずから携わり正確な発掘記録を残すほ



か、ときには大きな発見をしている。帝室付属高等美術学校学生でありながらロシア考古学会に入会し卒業後は考古学における美術の役割について一連の講義も行った。

美術学校卒業作品の「キエフへの悲報」(下図)にみられるようにロシア史に造詣の深い作品を矢継ぎ早に発表し、首都の美術界でめきめきと頭角を現した。1906年には帝室芸術振興協会付属美術学校の校長に任ぜられ1918年まで精力的にその任に当たり、この時代、美術学校は敷地を拡げ、各種学科を開設し、特にイコン画家の養成を美術学校の教育課程に加えた。レーリヒは舞台装飾にも才能を発揮し、1913年パリで初演され聴衆の度肝を抜いたストラビンスキの「春の祭典」の革新的な舞台装飾もレーリヒの手になるものである。

レーリヒはレーピン、ヴルーベリ、ベヌアなど画家仲間とともにしばしばロシア各地を訪れイコンを始め古物の蒐集を行い、失われてゆくロシアの伝統美の保存に努めた。

1904年は特に多くの地方をまわり、ロシア西端の地であるスモレンスクではテニシエワ公爵夫人の所領タラーシキノに逗留し教会の装飾を手掛けている。

モスクワから急行列車で3時間半、スモレンスク駅から車で30分の距離にあるタラーシキノはモスクワ近郊アブラムツェボと並ぶ必見の土地である。